腿動脈損傷1例，合計10例で，いづれにおいても良好な結果を得ている．また，術前に腎病変を知る上で，DTPA によるアンギオグラフィーを用いて腎の機能，形態を動態的に把握することが可能になった．

RI アンギオグラフィーの侵襲が少ない．反復再現性があること，放射線被曝量が少ない，薬剤の副作用が少ない，コンピューター解析にて定量化出来ることの利点を生かして外来のスクリーニング，術後の Follow up 等に利用出来る．

16. 血管造影所見と RI 循環動態よりみた"いわゆる白ろう病"

篠原　正裕
（北大・放）

われわれは，いわゆる白ろう病における血管病変の検索およびその末梢循環について，血管造影と末梢循環動態検査を施行し検討を加えた．血管造影は両上腕動脈に直接ベニウラ針を刺入し，全麻下で撮影したが，白ろう病 (31 hands) は対照 (41 hands) に比して浅毛掌動脈弓の不全型が若干多く，尺骨動脈末梢から浅手掌動脈弓起始部にかけて動脈壁の硬化，不整像が高率 (81%) に認め局所の振動刺激による器質的血管病変の存在が推定された．R.I 末梢循環動態検査は血管造影約1時間後 ^{133}Xe および ^{99m}Tc-MAA を動注しミニコンピュータで情報を収集し，R. O. I. を各指に設定し K 値の計算や，5点 Smoothing 法による Dynamic curve などを求めたもので白ろう病についてはまだ一定の結論を得ていないが，Diazapam 静注前後の RI 動態曲線では静注後で Wash-out curve の改善や値の増加などを認めたことから Diazepam 静注により，Spasm の影響をいく分解除したものと考えた．

17. 内視鏡的膵管造影の膵シンチグラムについて

近間　敏治　　竹中　靖彦
佐々木　修　　坂井　洋一
藤田　信行　　松家　康裕
禹　　博司　　朴沢　英憲
（釧路労災病院・内）

1972年より約1,000例の膵シンチグラム，1,700余例の内視鏡的膵管造影を経験しているが，今回は ERCP 異常像をみた症例の膵シンチグラムに検討を加えた結果，次の知見を得た．

1) 慢性膵炎と確診しても，シンチグラムでは，大部分の例が正常像を示した．
2) 膵石等の膵組織の荒廃著しい例では，シンチグラムは全例異常所見を認めた．
3) 膵癌例はシンチグラムでも異常所見を認めた．
4) シンチグラムの所見から膵病変の質的診断は困難であった．
5) ERCP 正常例の中にもシンチグラム上，異常所見を呈するものが多くあり，現在の方法でスクリーニングするには問題がある．

18. ^{99m}Tc-DMS の使用経験

柏木　茂喜　　鈴木幸太郎
勝浦　秀則　　表　　英彦
（北大・放）
古舘　正従　　小倉　浩夫
須崎　一雄
（北大・放）

新しい腎スキャニング剤 ^{99m}Tc-DMS を用いて170例の検査を実施したので使用経験を報告した．

^{99m}Tc-DMS の標識率は調整直後および4時間経過後についてメチルアルコールで展開測定した結果いずれも 99% 以上の高率を示した．

腎への集積状態は静注直後からミニコンにデータ収集しダイナミックスカーブを作成したが徐々に増加し40分以内にピークはなく，1, 2, 3, 4時間後のイメージを撮り左腎・右腎・バックグランドの3点に ROI を設定しトータルカウントを表示

Presented by Medical*Online